

◆課題作品 芥川龍之介「蜘蛛の糸」

①【選んだ一行】

「自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多かんだたの無慈悲な心が、そうしてその心相当の罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、お釈迦様の御目から見ると浅間あさましく思召おもほめされたのでございましょう。」

【選んだ理由】

何か大きなチャンスがあると、人の本性がでてくるんだなと感じた。そのチャンスをつかみとりたいと必死になって周りが見えなくなってしまうからだと思う。これは誰にでも言えることではないだろうか。だが、ここでの行動の違いが結果を大きく左右するのだ。犍陀多かんだたは、自分一人でそのチャンスをつかもうとした。蜘蛛の糸が切れてしまうのではないかという不安や焦りが先行して、他人を思いやる気持ちに欠けてしまっていたと思う。他の人の気持ちも想像できていたら、結果は全く異なるものになっていただろう。これは、日常生活でも言えることだと思う。自分がピンチの時こそ、周りをよく見て冷静に行動できるようにしたいと思う。また、どんな時でも相手のことを思いやる気持ちが大切なんだと感じた。みなさんはどうだろうか。自分の普段の生活を見つめ直してみるのもいいと私は思った。

②【選んだ一行】

「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗むやみにとると云う事は、いくら何でも可哀かあいそうだ。」

【選んだ理由】

どんな人にも優しさは必ずある。そんなメッセージがこの一行から伝わってくる。私はこの言葉を読んだ時、感動してしまった。なぜなら、この言葉を発した人物が多大な悪事を働いた犍陀多かんだたという男だったからだ。

私はこの言葉を読んだ時、感動と同時に反省をしなければならないという気持ちになった。なぜなら、自分は嫌いな人の良い部分を見ていなかったからだ。悪事を働いたと聞くと、その部分にしか目を向けない。でも、ふとした時、どんなに嫌いでもその人の優しさに救われる時がある。私はそんな瞬間を勝手に記憶から消していて、「嫌いな人」とひとくくりにしてしまっていたのだ。

もし、私がこの言葉を読んでいなかったら、自分の器の小ささに気づくことができていなかっただろう。多大な悪事を働いても、人に嫌われていても、どんな人にも優しさがあると教えてくれたこの言葉は、私の心の中にずっと在り続けるだろう。

③【選んだ一行】

「この犍陀多かんだたと云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊おどろぼうですが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。」

【選んだ理由】

犯罪をおかした人は、これから悪いことばかり続けて、一生、善良な人にはなれないのだろうか。今まで何度か考えたことがある。考えた結果、私は、意識や努力によって、悪い人も善良な人になれると考えた。しかし、他の人の役に立つような良いことをしても、だれも見えていないことだってある。でも、自分がやっていることをだれも見えていなくても、たとえそれがささいなことだとしても、良いことに変わりはない。だれかが悪いことをしたとして、「この人はこれからも悪いことしそうだな。」と考えて、思い込んでしまうのではなく、「この人はきつと反省して、もう二度と悪いことをしないだろうな。」と考えることも大切だと思う。一つの言動に対する印象にとられすぎないこと。これを、この一行に教えてもらった。

④【選んだ一行】

「しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着とんちやく致しません。」

【選んだ理由】

私のクラスでは、テストが返ってきた後、テストの点数がどれくらいだったのかで話が持ち切りになります。

私は前まで、自分より高得点の人を見ると、少し落ち込んでいました。自分と他の人を比べてしまい、自信がなくなっていました。もっと点数を上げるにはどうすればいいのか考えるようになりました。考えた結果、他の人と自分を比べるのではなく、前の自分と今の自分を比べ、どこがどのように変わったか見ようと思いました。

私はこの一文を読んで、まさに、他の人を気にせず、自分自身と向き合うことを表していると思いました。蓮が、少しも他の事に頓着せず、蓮自身の時間を過ごしていると考えたからです。犍陀多かんだたも、他の人を気にせず、目の前にある糸を懸命に上っていれば、天国に行けていたと思います。私は、今年受験があります。自分自身に目を向け懸命に努力をしていきたいです。

⑤【選んだ一行】

「こら罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。」

【選んだ理由】

なんという利己主義であろう。自分の罪を棚に上げて我が先にと救いを求めてその糸に縋り、他の罪人を蹴落とそうとするなんて。これを読んだとき人はどう捉えるだろうか？私は共感できるかもなんて思ってしまった。だって成績が上がったときも逆上がりができたときも成し遂げるために自分が努力しただけだから。つまり、自分で物事を成し遂げられれば良いと思っている。

でも大切なのは人と協力することと後に私は気づく。犍陀多は蜘蛛の糸に群がっていた罪人を自分の足を引つ張る者たちだと決めつけていたのかもしれない。もしかしたら一緒に上がっていれば糸は切れずに天までたどり着けたかもしれないのに。

人は一人では生きられない。何を買うにも食べるにも作った人がいる。人は人によって生かされている。その見極めができないと「蜘蛛の糸」は切れてしまう。元の環境に逆戻りしてしまうのだ。

⑥【選んだ一行】

「自分ばかり地獄からぬけ出そうとする」

【選んだ理由】

責任というものは、誰もが負いたくないものだと思うだろう。私もその一人だ。嫌なことや失敗があれば、誰かへ責任転嫁し、自分は悪くないんだと周囲に見せつけ正当化する。こうして、自分は地獄からぬけ出し、他人を地獄に落としてしまう。しかし、結局は足を踏みはずして自分も地獄へ落ちてしまうように、罪悪感や自己嫌悪に陥るものだ。

ワクチンを接種すれば副反応が出るのと同じように、自分のメリットだけを取り入れようとしても、自然とデメリットもついてくる。そう、何かを得るためには、何かを失わなくてはならない。ならば、最初から自分の過ちを認め、責任を持ち、どのようにして良い方向へ変えていくかを考える方が得策ではないだろうか。行動を起こせば責任がともなう。社会人になればなおさらだ。この一行は、今の私が解決すべき課題に気づかせてくれた。

⑦【選んだ一行】

「御釈迦は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。」

【選んだ理由】

御釈迦様は、小さな蜘蛛を助けた犍陀多を血の池の底の地獄から救い出そうとして、蜘蛛の糸を垂らしたのに、結局自分ばかりぬけ出そうとする犍陀多を前と同じ考えだったのだと思ったのではと思いました。私はこの「蜘蛛の糸」を読んで、日常の様々な部分と重なると思いました。特にこの一行は御釈迦様の心情が読み取れると思います。犍陀多の「もうしない」「もうやらない」という気持ちを信じて助けたのに、また同じ失敗をした、反省していないなど、一行で少しずつ感情が動いているのがわかります。

現在も犍陀多のように犯罪を犯した人が、罪をつぐなわないことが多く、犯罪が増えている印象です。私は犍陀多のような蜘蛛の糸に縋りついて助けを求めるような生き方ではなく、自分が蜘蛛の糸を下ろす人間になりたいです。

⑧【選んだ一行】

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

【選んだ理由】

月も星もなく、決してきれいとはいえない空。そこに短く垂れているきらきら光った細い糸は、たった一つの極楽への道だった。最初はもしかしたら極楽へいけるかもしれないと思って登り始めた糸だったが、最後には自分だけが地獄からぬけ出したという思いに変わってしまったため、断れてしまった蜘蛛の糸と共にその場所へ落ちてしまった。もう登ることができない糸が、月も星もない空の中途に、きらきら光りながら垂れている。さっきまではもしかしたら極楽へ行けるかもしれないと思っていたあの糸が、もう登れなくなつてからも短く垂れて残っていることで、本当に極楽へ行けた道だったのだと後になって気づかされる。これは、あるとき失敗してしまつたからこうなつてしまつたと後悔するが、そんなことに今気づいてもどうしもしならないということを知つた自分のようで、それを気づかせてくれた一行だと思う。

⑨【選んだ一行】

「自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当の罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまつたのが、御釈迦様の御目から見ると浅間しく思召されたのでございましょう。」

【選んだ理由】

自分さえ極楽に行ければそれでいい。という気持ちでこの行動を行つた犍陀多。自分、自分と自分のことを考えている。自分のことだけを考えていて、いいことはあるのだろうか。それは自分に返ってくる。それは今も同じ。私がおかすれば悪いこともよいこともかえってくる。例えば、妹によいことをすると自分にもよいことがかえってくるだろう。このように周りの人のことも考える。この一文から今の生活をいろいろな人につなげていきたい。